

吃音の子 ありのままの君で 親子キャンプ30回目

有料記事

小若理恵 2019年8月27日15時00分



演劇の発表をする子どもたち＝2019年8月25日、滋賀県彦根市

吃音（きつおん）を隠さなくてもいいんだよ、そんな子どもを丸ごと受け止めようよ――。言葉をうまく出せない子どもとその親が全国から集う年1回のキャンプが30回目を迎えた。今年は23日から25日まで滋賀で開かれ、普段話し方に自信が持てない子どもたちが励まされながら、大きな声を出して演劇を発表した。症状を受け入れ、前向きにどう生きていくかを親子が考える場になっている。



「吃音でも悪くはなかった」

「ん、ん・・・お、おれのロバがいるのか！」

25日、滋賀県彦根市の荒神山自然の家。愛知県刈谷市の高校3年角田乃音（のん）さん（18）が声を張り上げた。小学6年から毎年参加したキャンプは今年で最後。演劇「コニマーラのロバ」で、自ら「主役をやりたい」と手を挙げた。

演劇発表後の卒業式で、角田さんは「18年生きてきて、吃音でよかったと思えることは多くなかったけれど、吃音でも悪くはなかった。キャンプでたくさんの仲間ができた。これから不安はあるけれど、勇気を持って歩んでいきたい」と語った。

滋賀県草津市から初めて参加した小学6年山本里桜（りお）さん（11）は、「みんなが自分と同じで安心した」。学校での毎朝の健康観察で返事がなかなかできず、クラスメートからばかにされて傷ついていた。母のりこさん（46）は「吃音があることで生じる苦勞も上手に受け流せるようになってほしい」と話す。

表現の楽しさ知って

今年の「吃音親子サマーキャンプ」には吃音を抱える小学生と中高生27人の子どもとその親ら計114人が参加。大阪、京都などの関西のほか、宮城、千葉、沖縄などからも集まった。

主催したのは、吃音の人を支援する任意団体「日本吃音臨床研究会」（大阪府寝屋川市、伊藤伸二代表）などで作る実行委員会。1990年から続けている。演劇の練習と発表のほかに、子どもと親に分かれ、日頃の悩みや思いを語るプログラムもあった。

子どもたちに付き添い、演劇を指導した東京学芸大准教授の渡辺貴裕さん（教育学）は「吃音の子にとって安心してコミュニケーションの手応えを得られる場。演劇を通じて、まっすぐに働きかけ、他人を動かす体験は自分を変えることにもつながる」と話す。

研究会代表の伊藤さんにも吃音がある。キャンプに演劇をとり入れるのは、小学2年の時、学芸会でセリフのある役を外され悔しい思いをしたためだ。一方で、吃音を気にして人前で話すのを苦手になっている子、からかわれて不登校になる子を見てきた。伊藤さんは「表現する楽しさを味わってもらい、仲間とかかわる喜びを感じてほしい」と話した。

吃音を治そうとしたり隠そうとしたりすることに重きを置くのではなく、子どもたちには将来やりたいことや夢を持ってもらいたい。キャンプがそんなことを考える場になればと願ってきた。

延べ2166人の親子がキャンプに参加してきた。スタッフの一人で兵庫県姫路市の会社員浜津光介さん(32)はキャンプの卒業生。恩返しの気持ちで大学生の頃からキャンプにかかわってきた。「いかなる時も吃音を隠そうと小さな声で話していた僕が、キャンプに参加して救われ、大きな声で話せるようになった。子どもたちにも何かを得てもらいたい」とエールを送る。

伊藤さんは言う。「吃音があっても、何でもできる。自分を認め、人生を前向きに生きてほしい」。来年以降も続け、背中を押すつもりだ。

生き方考える支援を

吃音などの言語障害に詳しい小林宏明・金沢大教授(特別支援教育学)によると、吃音の主な症状は「わ、わ、わたし」と音を繰り返す「連発」、「わーたし」と音を伸ばす「伸発(しんぱつ)」、「……わたし」と言葉が詰まって出ない「難発」などがある。

吃音がある人は世界人口の1%前後。原因は遺伝的な要因や脳の機能障害などとわかれているが、はっきりと分らない。治療法は確立されていない。

幼児期は20人に1人に症状がみられるが、8割程度は自然になくなる。学童期まで続くと、言語聴覚士の支援を受けるなどして体の緊張をほぐし、症状を軽くする方法を覚えたりするケースもある。

吃音の子は言いにくい言葉や会話を避けたり、自信をなくして消極的になったりすることがある。小林教授は「吃音を悪いことだと思い、一人で抱え込まないように、幼少期から症状やコミュニケーションについて学ぶ機会があるのが望ましい」と指摘する。

独立行政法人・国立特別支援教育総合研究所の牧野泰美・上席総括研究員は「治る保証がない中で、吃音がある子がどう充実した人生を過ごすかに視点を置いたサポートが大切。キャンプの内容や理念は保護者、教員、言語聴覚士にとっても、子どもと考える有意義な機会だ」と話す。(小若理恵)

朝日新聞デジタルに掲載の記事・写真の無断転載を禁じます。すべての内容は日本の著作権法並びに国際条約により保護されています。

Copyright © The Asahi Shimbun Company. All rights reserved. No reproduction or republication without written permission.